

# 麗澤大学に学んで



Global Dormitory

麗澤大学では本学における教育、特に建学の精神を中心とした人間教育について、教職員や学生、部活動の指導者、保護者、卒業生などが、お互いに議論を深め、かつ、それぞれの実践や現状を報告するために、年一回冊子として「麗澤教育」を発行しています。ここに掲載しますのは、平成28年4月に発行しました「麗澤教育」第22号〈特集 リーダー教育〉から4年生（平成27年度）の「寮生活」についての報告です。

平成28年4月1日

**麗澤大学**

**学生寮” Global Dormitory”**  
**集団生活を通じて自主性が身につく、学生主体の寮生活**  
**「学生の自治運営が原則」の学生寮です**

麗澤大学は、本学の前身の道徳科学専攻塾が創立された昭和 10 年以来、男女共学と全寮制度を教育の特色の一つとしてきました。その後、時代の変化と規模の拡大に伴い、全寮制から希望入寮制に移行しましたが、全寮制時代からの伝統と「学び」の精神は連綿と受け継がれています。

学生寮は、地方出身の学生や外国人留学生の経済的な支援という側面もありますが、それ以上に人間形成の場として、また国際的な交流の場として、その学習効果が期待される場でもあります。

部屋の構成は時代のニーズによって相部屋ではなく、個室を中心とした寮生活に変更しましたが、下級生から上級生まで幅広い人間関係を大切にする寮長体制は維持してきました。ただし、全寮制時代と比べると、共同生活の意義や「ルームメイト」というコミュニティの意識が希薄となっているという問題もあり、それらを解決するためにユニット制を導入しました。

各ユニットは学年、国籍が混在する 6 人のユニット・メイトで構成され、その中からドミトリー・マネージャーの役割を果たす「ユニット・リーダー」を学長が任命します。1フロア 4 人のユニット・リーダーの合議によって寮生活の安全と秩序を図り、またユニット・メイトの生活状況の把握とその指導を行います。

毎月開催されるユニット・リーダー会議を中心に寮生活の実際は学生が主体となって運営します。また、ユニット・リーダーには年二回の合宿と年一回の学内でのユニット・リーダー・セミナーを開催し、リーダーとしての学びを深めます。

平成 25 年 3 月に竣工した Global Dormitory では、ユニット内の構成を日本人と外国人留学生の半々とすることによって、いろいろな海外の留学生と交流することができます。日常的な寮生活をとおして異文化と接し、国際的な感覚を自然と身につけていくことができるのも大きな特色です。

## 寮を想う

経済学部 経済学科 4年 中村由起

「寮」 想い：自らが学生寮を想い、寮生をはじめとする学生寮全体から愛される」

これは、私が学生寮でユニット・リーダー、そしてフロア・リーダーを務めるうえで目標としていたことである。まずはこの目標の意を、学生寮での経験を基に述べさせていただく。

まず、「自らが学生寮を想う」ということについてである。私はリーダーとなり寮について考える時間が大幅に増えた。これは、リーダーとなれば自然とそのようになるのではないかと思う。例えば、部活動や委員会、サークルなどのリーダーとなればその団体の事を考える時間が自然と増えるだろう。しかし、私はその自然と考える時間だけではなく、意識的に寮について考える時間を作っていた。それは、平成 26 年度に学生寮の男子議長を務めさせて頂いた経験が大きな要因となっている。議長として、月に1度のユニット・リーダー会議やフロア・リーダー会議を充実した、有意義なものにするためには自らの言動などをどのようにするべきかを考えていた。この会議では、寮生活のあらゆる問題について議論するが、その際に自身のことだけを考慮して発言したり、その場しのぎのような考え方で対処したりすることは解決につながらず、より良い方向に進むこともできないと考えた。そのようにならないためにも、何が今の寮において大切なのか、どのようにすれば寮全体のためになるのかを考える時間を設けていた。1人で考える時間もあれば同じ境遇にあるユニット・リーダーたちと考える時間を作ることもあった。近年、男子寮では、日本人学生よりも留学生の方が多くなってきている。その際に、ユニットのルール作りなどのユニット運営はより慎重に行うことが重要だろう。この自らのユニットの状態を鑑み、ルール作りなどを行うことこそが、「自らが寮を想う」ことの入り口であると考えている。

次に、「寮生をはじめとする学生寮全体から愛される」ということについてである。私は、初めてユニット・リーダーを務めた時に次のような経験をした。寮で初めてリーダーを務めるということやユニット内の私以外の5人は年上であったことから、甘く見られないようにと厳しく接していた。また、「ユニットは綺麗に使用して欲しい」、「掃除はこの程度のレベルまではやって欲しい」などといった1人よがりの、ユニットのメンバーへの想いを抱いて生活していた。しかし、そのような状態では温かい雰囲気は生まれず、ある1人の留学生と掃除のやり方を巡って衝突したことがある。このような経験から、どのような態度や気持ちでリーダーを務めるべきかを考えるようになった。その際に、これまでは「自分もこれだけ考えて生活しているのだから他のメンバーもこのくらい考えて生活して欲しい」という考えだけで生活していたが、「他のメンバーが“ユニットのために、寮のために掃除しよう！”などと想ってくれるような態度や気持ちをもって生活しよう」と考えるようになった。「自らが寮を想う」ということはリーダーになったことでできるようになっていたが、このような経験をしたことで「自らが寮に愛される」ようにならないと考えるようになった。

次期ユニット・リーダーに伝えたいことは、以下の二つである。

一つ目は、これまで述べてきた「寮」 想い：自らが学生寮を想い、寮生をはじめとする学生寮全体から愛される」ということが実現されてこそ、リーダーとして過ごす寮生活がより有意義なものになるということである。二つ目は、「他のリーダーやユニットのメンバーを頼るべし」ということであ

る。これは、私がリーダーをさせていただいた時に欠けていた点でもある。一つ目では自らが考えること、寮を想うことの必要性を述べたが、問題に正面から向き合うことが難しく、苦しんだこともあった。そのような時に、是非とも他のリーダーを頼って頂きたい。麗澤大学の学生寮には 51 人のユニット・リーダーがいる。つまり、同じ想いや悩みを持つリーダーたちが身近にいるということである。この点を上手く活用して頂きたい。一人では解決することが難しい問題も他のリーダーを頼ることで乗り越えられると考える。また、ユニットのメンバーは必ずリーダーの動きを見ている。リーダーとして生活している部分を見てくれている存在である。苦しい時には、他のリーダーに率直に助けを求めると、必ずそれに応えてくれると考える。

最後に、『麗澤教育』（第 21 号）の「学生寮のリーダーを通して」の中でも述べさせて頂いたことを繰り返したい。「私は、この麗澤大学で 3 年間寮生活をさせていただいたことで、言葉では表現できない喜びや感動、学びを得ることができた。このような機会を与えてくれた両親をはじめとする家族や教職員の方々、そして先輩方すべての寮生に感謝したい。」

私は、この感謝の気持ちを忘れず、抱き続けながら、これからの人生を歩んでまいります。

## 「学生寮のリーダーを通じて変化したこと、得た経験」

外国語学部外国語学科英語コミュニケーション専攻 4 年 藤屋桃子

私は 4 年生であった一年間を学生寮のユニット・リーダー、フロア・リーダー、そしてそれらをまとめる女子議長を務めるという、大変だがやりがいがある、とても密度の濃い経験をしました。3 年生のときにもユニット・リーダーやフロア・リーダーは務めていましたが、そのときとは気持ちの面など違っていたことが 2 つあります。

まず一つ目は、「自分から行動する」ことです。元々積極的に動く性格ですが、時として誰でもやれることに対しては「きっと誰かがやってくれるだろう」という考えが頭の隅にありました。しかし議長になってからはそういう考えはなくし、「自分がやらないと事が進まないかも」と少し極端なぐらいに考える習慣が知らぬ間についていました。

二つ目は、「手本になる」ということです。例えばユニット内の掃除の仕方が自分が教えた通りでないとしめます。それを口頭で注意するだけでは口先だけだと思われたり、聞く耳をもってくれないかもしれません。そういうときには自ら行動で示して、相手にしてほしいことを率先して行います。そうすれば、「百聞は一見に如かず」という諺もある通りで、自分の言い分がストレートに伝わるのでお互いが伝えられない、伝わらないことへのストレスがなくなります。そして手本になることをするのは、誰かが見ている前だけではなく、誰もいないときにすることも必要です。例えば、キッチンを汚してしまったが拭くのが面倒くさかったのか汚れたままだったとき、そこを見て見ぬふりをしないということです。もし汚してしまった本人が分かっているながら放置していた場所がきれいになっていると、「今度から気を付けよう」となるかもしれません。実際私のユニットでは、自分で使ったところを後の人のためにきれいにしていくユニット・メンバーがいました。それを見たとき、「地道に行動してきたよかった」と思い、陰ながらの行動を見てくれる人は見てくれると気づかされました。

最後に、これから学生寮を引っ張ってくれる後輩に、これまで経験してきたことを基に、伝えたいことが二つあります。

一つ目は「自分色のユニットをつくる」ことです。それぞれのユニットの留学生と日本人との構成比、国籍、出身地など、すべてのユニットが異なります。それぞれのユニットには「個性」があり、一つとして同じユニットはありません。例えば自分の隣のユニットが旅行に行ってきた話を聞いたとします。それを聞いて自分のユニットと比較をしてマイナス思考になってしまうのか、それとも聞いた話を参考にしてユニット内のイベントを考えるのか。周りのユニットの意見を聞くのはとても重要なことだと思います。現在、学生寮には51のユニットがあります。ということは、51通りの、またはそれ以上の各ユニットなりの運営方法があります。ですから、自分のペースで自分色のユニットをつくっていただきたいと思います。しかし、自分の好きなユニットの在り方を意識するあまり、ユニットのメンバーに押し付けをすることはしないようにしてください。一人ひとりのパーソナリティーに気遣うことも大事なことです。

二つ目は「自分だけで抱え込まない」ことです。ユニット内での悩みを打ち明けずに抱え込んだままではいいことはありません。打ち明けてみたら、たまたま別のユニット・リーダーも同じ問題に直面していたり、自分とは違った切り口で物事を考えていて、すんなりと問題が解決してしまったりなど……。全ては話してみないと分かりません。寮生のほとんどは大学に来てから寮生活を始めた人ばかりです。悩みがあってもおかしくはありません。気軽に相談を持ちかけることをしてみてください。

これらは私が女子議長をやってきたこの1年間で、特に思ったり考えたりしたことです。私はこの1年間で密度の濃い時間を過ごすことができました。現在の「グローバル・ドミトリー」の体制になって以降の議長は3年生がやっており、私のような4年生が務めた前例が男女通じてなかったので、立候補はしたものの就職活動のことなどを考えると正直不安でいっぱいでした。しかし、任期が終わった今、「あのとき立候補してよかった」と思います。もし議長にならなければ、今ほど寮のことについて真剣に考えることがなかったでしょう。この学生寮での経験はこれからの人生の糧になるでしょう。そして心から思います。「麗澤大学学生寮」の一員として学生生活を過ごすことができ本当によかったです。大切な思い出の一つとなりました。

## 寮生活とユニット・リーダーを通じて感じたこと

外国語学部外国語学科日本語国際コミュニケーション専攻4年 ちよんぐんよん 鄭根英

3月の卒業を控えた現在、約2年間の寮生活を振り返ってみると、私の寮生活は、人との繋がりの温かさを感じ、責任を持って人の前に立つ立場の重みを再確認した貴重な時間だったと思います。

私が寮に入ったのは2013年9月、2年次の第2学期からです。2011年4月に来日して以来ずっと一人暮らしで、韓国でも親と一緒に住み、他の人と生活したことがありませんでした。ですから、うまく寮生活が送れるのか少し不安もあり、寮に入ることを迷いました。このような不安と迷いがあったにもかかわらず入寮を決意したのは、日本文化を理解し、日本の共同生活を体験したいという気持

ちがより強かったからです。また、麗澤大学の寮は一人部屋なので、ある程度プライベートな空間を確保することができることも、寮に入ったもう一つの理由です。私は日本での就職を希望していたので語学力以外にも日本文化や日本社会に対する理解が必要だと考えました。そこで、一人部屋が使えるうえで、日本人学生と留学生が一つのユニットで一緒に生活する国際寮(グローバル・ドミトリー)は自分にとっては最適の場所でした。

寮に入って感じたことは、人の情と温かさでした。寮では、「おはよう」、「行ってらっしゃい」、「お帰り」、「頑張ってるね」など、温かい言葉をかけてくれる人がいました。寮事務の方はもちろんですが寮生たちが廊下や玄関などで会うと、こうした温かい言葉をかけてくれたのです。寮に入ったばかりのときは、どのように挨拶すればよいのか迷い、うまく返事もできず、ただ笑顔を返すことしかできませんでした。返事がうまくできなかったのは言語の問題ではなかったです。何年も日本語を勉強していたので言葉の意味や使い方は分かっていたつもりです。しかし、頭で覚えることと心で受け入れることは違います。私は普段使っていなかった言葉を使うことに違和感を覚えていたのです。しかし、次第に寮生活にも慣れてきて、日常的な挨拶も少しずつですが、できるようになりました。ある夜、アルバイトを終えて寮に帰って来たら、同じユニットの寮生から「お帰り」と声をかけられた時は、「あ、家に帰ってきたんだな」という気持ちになり、心が温かくなったのを、今でも覚えています。その時、人との付き合いを通して、人間としての、大切な何かがあることに気づかされました。

以来、心を開いて以前より積極的に寮での活動に参加しようと思いました。以前は、寮のイベントなどに参加することすらしなかった私がユニット・リーダーをしようと思うようになりました。外国人である私が日本人と他国の留学生をまとめ、果たしてユニットを引っ張っていくことができるのか心配と不安もありましたが、前任のユニット・リーダーの励ましと推薦に勇気を出してユニット・リーダーを引き受けることを決心しました。

ユニット・リーダーを務めているときは、楽しいことの中で責任を持つことの大切さを感じる時期でもありました。ユニット・リーダーを務めていく中で一番記憶に残る思い出は、今年(2015年)3月谷川セミナーハウスでのユニット・リーダーセミナーでした。2泊3日の日程で行われたこのセミナーは、朝から夕方までのハードなスケジュールでした。リーダーセミナーでは、副学長の井出元先生をはじめ諸先生方や学生支援グループ、学生相談センター、寮事務の方々から「リーダーとは何か」「リーダーが持つべき心得とは?」「他人と協力することの大事さ」などを学び、リーダーとしての責任を痛感した貴重なひと時でした。また、ユニット・リーダーとしてどのようにやっていけば皆が楽しく生活を送れるのかを考える時間でもありました。

一方、きついスケジュールの中でも楽しい思い出もたくさんあり、より深い人間関係を築くこともできました。他のユニット・リーダーとも話し合い、一緒に温泉に入るなどして、公的な日程を終えた後は楽しく過ごせました。卒業を控えた今思うことは、麗澤での寮生活は、私がこれまで経験したいろいろな出来事の中でも上位に挙げられるほどの楽しい思い出の一つであったということです。

寮での公的な活動は新学期が始まる前の新寮生の入寮からでした。新たな場所での生活に期待と不安を抱いている新寮生の顔を見ていると日本に到着した時の自身のことが思い出され、寮に対する良い第一印象を与えるために笑顔で新寮生を迎えました。また、入学式当日は留学生と新入生を入学式の会場まで引率し、まるで自分が親になってもなったような気持ちになったことも記憶に残っています。

それぞれ個性を持っている人たち全員を満足させるユニットを築いていくことは簡単ではありま

せん。そこには文化の違いがあり、言葉の壁もありますが、私は、寮生は自分の行動に責任を持つ大人であることと大人としてお互いを尊重することを、常々心がけてきました。リーダーとしては不十分な私でしたが、諸先生方や寮事務の方々、他のユニット・リーダーたちの助けで無事に責任を果たすことができました。私を支えてくれた多くの方々に心より感謝したい。

## 寮は「成長の場」

経済学部経済学科 4年 飯塚沙織

ユニット・リーダーを経験して私は学んだことが三つあります。それは、①新しい環境に飛び込む勇気を持つ大切さ、②リーダーを実際に経験することの重要性、そして③人とのつながり方です。

「ただ生活をする場所」これがユニット・リーダーに就く以前の私にとっての寮でした。ユニット・リーダーが主催する寮でのイベントには全く参加せず、寮生とも必要最低限の交流しかしないなど、とても消極的な生活を送っていました。今振り返ってみると、なんでもったいない1年間を過ごしてしまったのか、と後悔したくらいです。

このような生活をプラスの方向に転じるきっかけとなったのが3年次より2年間経験したユニット・リーダーでした。最初は、自身の定着してきている寮生活のリズムが変わってしまうのではないかと不安でしたが、春休み(3月)に行われた2度にわたるユニット・リーダーセミナーを終えたころ、私はたくさんの期待を胸に、やる気に満ち溢れていたことを覚えています。それは、セミナーを通しての貴重な学びが気持ちを変える後押しをしてくれたからです。

セミナーでは教職員の方々から学生寮の歴史を教えて頂き、その偉大さに感銘を受けたこと、先輩方がどのようにリーダーを務めあげてこられたかの体験談やアドバイスに励まされ、自分の目指すべきリーダー像が明確に描けたこと、そしてこれから一緒に頑張っていく仲間たちと出会い、打ち解けられたことなどによってユニット・リーダーになる心構えができました。この時に一歩踏み出し、リーダーを引き受けたからこそ、今の私があるのです。現状に満足することなく、貪欲に、新しい環境を求めて自ら行動することがどれだけ大切なことなのか、を学ぶことができました。

ユニット・リーダーを務めていく上で気づいたことは、二つ目に挙げた、リーダーを実際に経験することの大切さです。私にとってリーダーとは、大学生活そのものをまるっきり変えてしまうほどの大きな経験だったと言えます。リーダーとして、運営者の側から寮を見る機会が増え、これまで知ることのできなかった様々なことに気づきました。特に、先輩方が今まで私たち寮生のために行ってくれた多くの陰の努力に衝撃を受けました。私は有り難みを感じるとともに、もっと協力することができたのではないかと反省の気持ちも強く持ちました。その時私は、先輩方への感謝の気持ちを忘れず、自分なりのアレンジを加えながら伝統を受け継ぎ、寮を守っていきたくと強く思ったことを覚えています。

私はリーダーとして、住みやすくて楽しいと思ってくれる寮生を一人でも増やしたいと思っていました。そしてそのために自分は何をすべきかを考えるようになりました。寮生一人ひとりとは違う人間であり、国籍や文化も様々で、当然、寮生の悩みや不安も十人十色です。そのような環境でリーダー

をやっていると、否が応にもそれらの問題に向き合うことになるのです。その時にはやはりつらい思いや葛藤を味わうこととなりますが、今となって考えてみると、それらの経験が確実に自身の成長の糧になっていると実感しています。そのような経験をいくつも経ているうちに、自然と視野が広がり、人を思いやり、考える力がついてきます。そうして私にとっての寮はただ住むだけの場所ではなく、「成長の場」という認識に変わったのです。

また、リーダーを一度でも経験した人は、多少なりともリーダーの気持ちが分かる人間になります。リーダーの気持ちが分かるということはとても貴重なことです。なぜなら今後社会に出ていく私たちは、何らかの集団に属す機会が増えますが、そこでリーダーの気持ちが分かる人間と分からない人間とでは、集団に与える影響力が圧倒的に違うと思うからです。井出元副学長は、「たくさんの人にリーダーを経験してから卒業してもらいたい」と常々おっしゃっています。その意味が、少し分かったような気がします。

三つ目に挙げた、人とのつながり方です。これは、私が出会ったたくさんのリーダーたちと共に過ごす時間から学ぶことができました。月に一度開催するユニット・リーダー会議では、リーダーたちとたくさん話し合いをします。「掃除になかなか出席してくれない子がいるんだよね」「郵便当番ってどうやって決めているの？」などといったユニット運営の悩みから、「フロアのみんなどもっと仲良くしていきたいからたこ焼きパーティーを開催しようよ」というイベント企画など、様々な話題があります。話し合っているうちに気づいたことは、同じ悩みを持っている人がすぐ近くにいるということです。そしてそれらの悩みを共有し、一緒になって解決していこうと助けてくれる仲間がすぐ近くにいるということです。リーダーとは団体戦であり、人と人とのつながりの中に存在しているのです。個人で努力することはもちろん不可欠ですが、時には仲間を頼る勇気を持ち、そして仲間を支えてあげる心の広さを持つこと、そして仲間を大切にしていこうと自ら意識していくことがリーダーとして成長していくためのヒントなのではないかと思います。

「この瞬間は今しかないし、やるからには全力で楽しみたい。」この気持ちが私の中に常にあります。リーダーという肩書はついていますが、リーダーの前に、一寮生であることに変わりはありません。すぐに立派なリーダーになれる人などいません。数えきれない喜びや悲しみ、葛藤や挫折、そしてたくさんの仲間との出会いなどを通して、少しずつ立派なリーダーになっていくのだと思います。

また、リーダー自身がワクワク、ドキドキ、笑顔が溢れる生活を送りたいと意識し、楽しい気持ちで毎日を過ごすことで、リーダー自身が、一寮生としての生活に喜びと笑顔が増え、その笑顔が寮全体に広がっていくのではないのでしょうか。「笑顔いっぱい楽しい寮」。後輩たちにはこれを目指して頑張っていてほしい。そして寮生みんなが、「寮で過ごした時間は人生の宝物だ」なんて言ってくれるような寮を築いていてほしいと思います。



## 今後の人生の糧となる、貴重な麗澤大学での4年間

経済学部経済学科4年 長谷部 まどか

私は、大学生活の4年間を麗澤大学の寮で生活してきた。この寮は1ユニット6人制で、だいたい日本人3人、留学生3人という構成である。私は最初、留学生、つまり「外国人と一緒に暮らす」ということに、とても驚きを感じ戸惑ってしまった。しかし、一般では到底考えられない環境に身を置いたことで、この4年間は自分自身に変化し、大きく成長できた、とても濃密な時間であった。

私が大きく成長したと感じる点は2点ある。一つ目は、「海外を身近なものに感じ、考えることができるようになった」ことである。寮には様々な国籍の方が私たち日本人と同じ場所で暮らしている。私が4年間の寮生活で一緒に生活したのは中国人、台湾人、韓国人、ドイツ人である。

世界から見た今の日本の置かれている状況といえ、日本は平和主義を主張しており、どこの国とも戦争をしていない。しかし、中国や韓国、ロシアとは領有権・領海権を争っており、外交の渦に巻き込まれているのは事実である。

この状態はここ何年も変わらず、<sup>こうちゃく</sup>膠着状態となっている。私は入寮する前はこのような問題が全く身近な問題に感じず、ニュースなどで何度も報道されていても自分には関わりのない「他人事」だと思っていて。そんな中入寮し、最初に同じユニットになったのは中国人とドイツ人であった。3人ともとてもいい人たちで、すぐ仲良くなることができた。

しかし、当時はちょうど2012年で、この年の夏、日中関係が悪化し、仲良くなった中国人の友達も帰ってこなくなってしまった。真偽は分からないが、もしかしたら日中関係の悪化が理由にあったかもしれない。私は、このときすごいショックを受けた。ニュースで報道している国際問題が、初めて自分に関係するものだと感じ、この時から真剣に様々な海外の状況、海外から見た日本の立ち位置について考えるようになった。そして、国際関係のニュースをより注視するようになり、リビングにいる友達や留学生、時にはその話題の中心となっている留学生と意見を交わした。

実際にその国の人と話していると、ニュースでは分からない国の現状、国民の真の意見などを聞くことができ、相手国の事情を知り、国際問題の難しさをより深く理解することができた。その上で、自分の意見と相手国の意見を同じ立ち位置で考えていくことで、自分の国の意見だけに偏った考えを持つのではなく、相手の意見をきちんと知った上で様々な問題について考えることができた。

争いを好む国などどこにもなく、常に自国の平和を願っている国ばかりである。ただ、自分の国を愛するあまり争いが生まれてしまうのである。国家間でも一度落ち着いて相手の話に耳を貸し、相手の立場を理解することで、どこの国にも気兼ねなく行き来できる世界になればと考える。

大きく成長したと感じる点の二つ目は「人をまとめる力がついた」ということである。私は2年間ユニット長を務めてきた。元々リーダーを率先してやるような性格ではなかった。それが友人からの推薦もあり、やることになった。

私は、この時大きな不安があった。それは「人を注意する方法が分からない」ということである。しかし、ユニット長になるとそのユニットのリーダーであるため、何か問題が起きればそのことについて注意し、必要があれば話し合いも行い問題解決をしていかなければならない。

注意する上で一番大変だったことは週1回の掃除の出席の心構えである。もちろん毎週掃除に出席してくれるメンバーがほとんどであったが、中には出席せずに遊びに行ってしまうたり、バイトを入

れてしまう子がいた。私になぜ、こんなにも掃除を重視していたかという、ユニット内を清潔に保つということはもちろんであるが、週1回絶対に集まる日があることで、メンバー間でお互いの存在確認をし、同じ場所を共有している意識を持ってほしかったからである。

日常ではみんな個人の生活リズムがあり、中々お互いに顔を合わせたり、話したりすることは難しい。しかし、週1回の掃除の時間を設けることで、何でもない他愛のない話でも相手が今どんな状況なのか、どんなことに関心があるのか、少しでも知ることで普段忙しくて顔を合わせるができなくても、メンバーを身近に感じ、また、そんなメンバーと同じ場所を共有しているこのユニットを「本当の家」のような大事な心の休まる場所として考えてほしかったからである。

このような思いから掃除に出てくれないメンバーには注意をしてきた。そこで、心がけたことは、ただ上から注意するのではなく、日常の中でそのメンバーと普通の会話をし、心の壁をなくすことでユニットを自分の場所だと感じてもらい、自然に掃除に出てくる気持ちになるように促した。結果、全員が掃除に出てくれるようになり、メンバー全員にとって居心地の良いユニットになったのではと考えている。

この麗澤大学の寮で過ごした4年間は私にとって自立心を育んだだけでなく、様々なことに目を向け、人と関わることの大切さと難しさ両方を教えてくれた、これからの人生の糧となる貴重な時間となった。